

コンラッドと仏教—『ノストローモ』に見る「三法印」

● 奥田洋子

ポーランド生まれのイギリスの小説家ジョゼフ・コンラッド（1857—1924）の作品は、これまで多くの欧米の文芸批評家によって解釈や分析が施され、またそれらの解釈や分析を正当化するさまざまな理論が、精神分析的批評やポストコロニアル批評、新歴史主義批評やフェミニズム批評の名で提唱されてきた。¹⁾これらの理論は、欧米の長い歴史と文化を背景としたものの見方や感じ方を内蔵しており、日本語を母語とし、日本文化を背景として育った読者に対して、日本的な発想を離れた新鮮な読みを提供してくれる。しかしまた一方で、「われわれ日本語使用者にとって、理論と呼ばれるものの多くは、海外からの輸入品」（鍛冶 32）であることも事実なのである。

では、欧米の作家の作品は、やはり欧米的な発想や思考形式を背景とした理論に基づいて読解・解釈されるべきなのであろうか。テキストの読解においては、「読み手が持ち合わせている知識が不可欠な要素となり、それに基づく推論がなされることによって、はじめてテキストが物語として成り立つ」（田近 186）。そうだとしたら、「読み」と「理論」との関係は、「読み」の方が先で、理論はその読みを可能にした読み手個人の言語・文化的背景があって初めて体系化され得ることになり、欧米の作家の作品であっても必ずしも欧米的な発想や思考形式を背景とした理論に基づいて読解しなくてもよいことになる。

たとえばここに、ひとりの仏教的な文化的背景を内蔵する読み手がいて、コンラッドの代表作である「闇の奥」（“Heart of Darkness” 1899）を読んだとする。その読み手は、物語終盤の、枠内物語の語り手マーロウがクルツの婚約者に嘘をつく場面まで来て、マーロウの「無限の慈悲がわき上がり、私の怒りは収まった」（“My anger subsided before a feeling of infinite pity.” 251）ということばと、その数十行先の枠内物語の語り手の「マーロウは語り終わって……瞑想する仏陀のような姿でひとり離れて座っていた」（“Marlow ceased, and sat apart...in the pose of a meditating Buddha.” 252）ということばを単純に結びつけ、マーロウは仏教的な慈悲心からクルツの婚約者に対して方便として嘘をついたのだと解釈する。「慈悲」という言葉の仏教における重要性を考えると、これもまたひとつの読みとして成立するのではないだろうか。

ジョン・レスター（John Lester）は『コンラッドと宗教』（*Conrad and Religion*）の中で、コンラッドの作品中仏教への言及が最も明示的なのは「闇の奥」と「フォーク」（“Falk: A Reminiscence” 1903）で、「闇の奥」には、「仏陀」（Buddha）という言葉が3回登場し、タイ（旧称シヤム）を舞台とした「フォーク」には仏教寺院（パゴダ）への言及が4回にわたって見出されると述べている。欧米の論文の中にも、特に1960年以降、これらの作品中の仏教的要素に注目したものがいくつかあるが、それらは概して断片的な議論に終わっている。レスターは「コンラッドの作品中では、仏教とヒンズー教はごく控えめに用いられ、特にコンラッドのヒンズー教の知識は非常に皮相的である」（“Buddhism and Hinduism are used sparingly in Conrad’s work and his knowledge of the latter faith especially seems very peripheral...” 66）と結論付け、コンラッドの作品中では、これら「東洋の神秘教の深い泉はまだ手つかずのままのようである」（“the deeper

wells of eastern mysticism appear to remain untapped” 67) と結んでいる。

ヒンズー教的要素はさておき、コンラッドの作品中の仏教的要素は、はたしてそれほど控えめだろうか。この小論では、コンラッドの書簡や作品に現れた世界観の特徴と、宗派を超えた仏教の基本観念と言える「三法印」に示唆された世界観の特徴とを比較し、代表作のひとつ『ノストロモ』(*Nostromo* 1904) にその類似性を探ってみたい。

「三法印」とは仏教の基本観念である「諸行無常」(「すべての現象界は、不生不滅の常住不変のものではなく、常に消滅し変化するものである」：水野 136)、「諸法無我」(「すべての現象的存在は永久不変ではなく、固定した性質や状態はない：水野 143)、そして、「一切皆苦」(「すべての現象は苦と感じられる」：水野148)を指す。コンラッドは仏教について間接的な知識はいくらか持っていたものの、信仰していたわけではない。コンラッドが強い関心を抱いていたのはむしろ「時間」(time)、「自我」(identity)、そして「(苦を含めた)感情」(emotions)であり、これらに対する彼の洞察が、たまたま仏教の三つの法印と符号したと考えられる。

まず、「諸行無常」に対応する「時間」を、コンラッドはどのようにとらえていたのであろうか。「時間」をめぐるコンラッドの世界観を端的に表しているものとして、1897年12月20日付けカニンガム・グレアム (Cunningham Graham) 宛て書簡中の次の一節が挙げられる。

たとえばここに、一台の(自動)編み機があったとしよう。その編み機は鉄くずの混沌の中から己を進化させてきた(中略)、そして見るがいい。それは編み続けるのだ……。これは不幸なことではある一だが起こってしまったのだ。それを妨げることはできない。(中略)

それは我々人間を編み出し、編みほどく。時間と空間をも、苦をも、死をも、墮落をも、絶望をも、そしてすべての妄想をも。一だからと言って別にどうってことはない。もっとも、この容赦ない過程を見ているのはときには面白いということは認めなければなるまい。

(There is a -- let us say -- a machine. It evolved itself...out of a chaos of scraps of iron and behold! -- it knits.... It is a tragic accident -- and it has happened. You can't interfere with it...

It knits us in and it knits us out. It has knitted time space, pain, death, corruption, despair and all the illusions -- and nothing matters. I'll admit however that to look at the remorseless process is sometimes amusing. (Karl & Davis I: 424)

ここでコンラッドは自分の世界観を、産業革命の産物のひとつとして登場し、十九世紀に英国各地の工場で使われた大型の自動編み機の比喩をとおして披露している。「それを妨げることはできない」や「この容赦ない過程」という表現は、この機械の編み出す世界が常に変化していることを暗示しており、必然的に「諸行無常」の観念を思い起こさせる。

さらに、人間が、編まれた生地の中に、あたかも編み模様のひとつのように編み込まれ、そして編みほどかれるという比喩は、仏教でしばしば用いられる同様の比喩、すなわち、人間を大海に生じては消えて行く一抹の泡、もしくは波の一波にたとえた比喩を思い起こさせる。1896年3月26・27日付けエドワード・ガーネット (Edward Garnet) 宛の手紙の中でコンラッドは、「もし我々が『常に変わり続け一決してあり続けることはない』のであれば、私があれば、私があればこれになろうとするのは愚かなことだ。何かになるということはまったくないと私にはよく分かっているの

だから。」(“If we are ‘ever becoming-never being’ then I would be a fool if I tried to become this thing rather than that; for I know well that I never will be anything.” Karl & Davis I: 268) と述べている。常に移り変わる世界では、「私」もまた変わり続けるのであるから、それはまた「諸法無我」の世界でもある。

同じ手紙の中でコンラッドは感情にも触れ、次のように言っている。

自分の個性というものが、何かどうしようもなく測り知れないものの、ばかげた茫漠とした見せかけに過ぎない、という真実が一度把握できたなら、心の安らぎはまもなく手に入る。そうなればあとは、自分自身の心の動きに身を任せ、そのときどきの感情に忠実であるほかない。それがいかなる人生哲学よりも真実への近道であるかも知れないから。

(When once the truth is grasped that one’s own personality is only a ridiculous and aimless masquerade of something hopelessly unknown the attainment of serenity is not very far off. Then there remains nothing but the surrender to one’s impulses, the fidelity to passing emotions which is perhaps a nearer approach to truth than any other philosophy of life. Karl & Davis I: 267-8)

この一節からも分かるように、コンラッドの関心は「苦」だけではなく、すべての感情(情緒)に向けられている。²⁾『ロード・ジム』(*Lord Jim* 1900)の中で枠内物語の語り手であるマローウが、ジムの海難審判に人々を引き寄せたのは、「人間の感情の反発力、威力、恐ろしさについて何か本質的なことが明らかになるのではないか、という人々の期待感だ」(“the expectation of some essential disclosure as to the strength, the power, the horror, of human emotions” *Lord Jim* 56) と述べるとき、それはまたコンラッド自身の人間の感情に対する強い関心を代弁していると言えるだろう。

先のガーネット宛の手紙でコンラッドが示唆しているように、世界が常により変わっているという事実と、人間もまたその一部としてより変わっているという事実は受け容れるしかない。だが、三番目の「感情」は少し違う。仏教では「精神的な苦は欲望や期待が満たされないことによって起こるのであって、個人的主観的なものであり、欲望や期待が多く激しければ激しいほど、それが充足されない場合の苦悩も大きい」(水野 151)と考えられている。コンラッドもまた1898年1月31日付けのカニンガム・グレアム宛の手紙の中で、「人間がいたましいのは、何も人間が自然の犠牲者だからではない。人間がそのことを意識しているからだ」(“What makes mankind tragic is not that they are the victim of nature, it is that they are conscious of it. Karl & Davies II: 30)と言っている。そしてこの事実は、「闇の奥」や『ロード・ジム』、『ノストローモ』や『密偵』(*The Secret Agent* 1907)、そして『西欧の眼の下に』(*Under Western Eyes* 1911)や『勝利』(*Victory* 1913)の登場人物をとおして具体化されている。その中には、最後まで自我に執着する者もいれば、一時的なりとも自我から解放される者もいる。結果はどうであろうと、どの作品にも登場人物が自分の感情と向き合う過程が具に描かれているのである。³⁾

コンラッドがこのように仏教と類似した世界観を抱くようになった理由としてはふたつの理由が考えられる。ひとつは、コンラッドが前半生において船員として海上生活を送ったことである。トマス・マン(Thomas Mann)はコンラッドについて、「この男の最も根深く、かつ最も個人的な経験は海である」(“this man’s very deepest and most personal experience has been the sea”

101) と言っている。船上、特に当時の帆船上の生活は、船員に常に海という自然と対峙することを強いた。ジョン・ゴールズワージー (John Galsworthy) もまた、「コンラッドの小説においては、自然が先で、人間が後である」(“In the novels of Joseph Conrad, nature is first, man second.” Galsworthy 1973: 91) と述べている。ゴールズワージーはさらに、コンラッドの作品の背景には、読み手に宇宙を感じさせる気迫 (cosmic spirit) が感じとれるとも言っている (89-92)。もうひとつは、ドイツの哲学者アーサー・ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer) の影響であり、このことは多くの批評家らによって指摘されている。ゴールズワージーによると、コンラッドは1900年前後にショーペンハウアーに強い関心と共感を抱いていたと言う。(Galsworthy 1927: 121)

コンラッドは、長年船員生活を送るうちに、海をとおして自然の脅威を目の当たりにし、自分自身の文化的背景であるキリスト教とは異なる目で自然を見るようになり、自分なりの世界観を形成して行ったのだと思われる。自然を変化としてとらえ、自我を変化する自然の一部としてとらえ、その結果、「変わり続ける自分」に抗うことから生じてくる人間の感情に強い関心を抱くようになった。そのような世界観は、コンラッドが後にショーペンハウアーの著作を読んだときに、そこに示唆された仏教的な世界観を理解する助けとなり、かつ、彼自身の世界観がそれによって強化されたと考えられる。そして最終的にはそれは、背景として、テーマとして、また人物造型の基盤として作品中に描かれることになったのである。

コンラッドは手紙、特にカニンガム・グレアムやエドワード・ガーネットのような自分の世界観を理解してくれそうな親しい友人宛の手紙の中では、しばしば自分の世界観に言及している。だが、作品中では明示的には言及していない。その理由として次のようなことが考えられる。19世紀後半から20世紀初めにかけて、ダーウィンらの新思想の衝撃を受けてイギリスの精神的風土はかなり不安定になっていた。とは言うものの、当時のコンラッドの読者の多くは、観念的にはこれらの新思想の影響を受けながらも、感情的にはなお伝統的なキリスト教的世界観を抱き続けていたであろうと思われる。コンラッドは、そのような読者に対しては、作品中で自分の世界観をあからさまに「語る」よりも、戯曲的、具体的な描写をとおして「見せる」方が効果的であると判断したのではないだろうか。そのひとつの例として、次にコンラッドの作品中もっともスケールの大きい『ノストローモ』を見てみたい。

コンラッドは、1902年10月に、短篇小説のタイトルとして初めて「ノストローモ」というタイトルに言及し、同年12月に起稿して約2年後の1904年10月に脱稿している。この作品は、1904年1月から10月まで *T. P.'s Weekly* に連載され、その直後にハーパー社から単行本として出版された。ズジスワフ・ナイデル (Zdzislaw Najder) はこの作品について、「コンラッドはこの小説の規模に打ちひしがれ、想像力への重圧が彼の精神力と体力とを消耗させた」(“Conrad was crushed by the size of the novel, and the strain on his imagination consumed his entire mental and physical energy” 291) と述べている。

この大作のあらすじを、タイトル・ロールのノストローモに絞ってごく手短かにまとめると、おおむね次のようになる。

南米の架空の共和国コスタグアナの港町スラコを訪れたひとりの若いイタリア人船員が、そこで宿を営むイタリア人の妻に乞われて下船する。荷役人夫の親方として実力を発揮するようになった男は、やがて「ノストローモ」(重宝な男)と呼ばれて支配階級の英国人やスペイン人らの間でも人望を集める。数年後、銀山の富をめぐるコスタグアナに革命が起こり、敵が進撃してくる中、ノストローモはインテリ気取りのデクーとともに銀塊を沖合の船に届ける任務を与えら

れる。だがこの夜、プラシド湾は無風で船は湾外に出られず、ノストローモらは湾内の小島のひとつに上陸して銀塊をそこに隠す。この任務の失敗の原因は、人力を超えた無風状態という気象条件にあったのだが、初めて挫折を味わったノストローモは、自分の能力とは筋違いの任務を与えた英国人らを逆恨みする。不運にも、この誤解を解く機会は一連の偶然のできごとのために次々と失われ、デクーが自殺した後、ノストローモは復讐心から銀塊を横領する決心をする。だが、皮肉にも、銀塊を横領した結果、ノストローモが生来の行動力を発揮できる機会は完全に失われ、人望を失った彼は苦悩のうちに死んでいく。

この作品では、第1部第1章でまず舞台であるプラシド湾の自然が紹介される。

菌立してそばだつ山並の稜線の向こうで夜が明ける。雪をかぶったヒグエロータが、青い空を背景に峰々の中から秀麗にそびえ立つ。(中略) やがて正午の太陽が、山々の落とした影を湾の上から消し去るころ、雲がふもとの谷間から流れ出る。(中略) 山々はまるでその何層もの灰色と黒の密雲の中に溶け込んだかのように姿を消す。雲はゆっくりと外海に向かって流れるが、その最前線は真昼の照りつける暑さのもとに消散する。(中略)

夜、上空を進む雲海は、真下に広がる静寂な湾を漆黒の闇ですっぽりと包む。闇の中に、今はここ次はあそこに時雨が降り出し降り止む音が聞こえる。

(The dawn breaks high behind the towering and serrated wall of the Cordillera.... Amongst them the white head of Higuerota rises majestically upon the blue.... Then, as the midday sun withdraws from the gulf the shadow of the mountains, the clouds begin to roll out of the lower valleys.... The Cordillera is gone from you as if it had dissolved itself into great piles of grey and black vapours that travel out slowly to seaward and vanish into thin air all along the front before the blazing heat of the day....

At night the body of clouds advancing higher up the sky smothers the whole quiet gulf below with an impenetrable darkness, in which the sound of the falling showers can be heard beginning and ceasing abruptly--now here, now there.

(*Nostramo* 6)

この壮大な自然描写の大きな特徴は、自然が刻々と変化する動的なものとして描かれていることであり、仏教的な無常観を彷彿とさせる。しかもそのような特徴は、エドワード・ガーネットが「留まることなく流れ続ける果てしない人生の河としての自然」(Nature as a ceaselessly-flowing infinite river of life” 38) と言っているように、この作品中の自然描写に一貫して見られる特徴なのである。

刻々と変わり続ける自然に代表される世界の中では、自分を含めたすべてのものもまた変わり続けるはずである。だが、この作品中の登場人物らの多くは、「変わらない自分」に「確信」(conviction) を抱き続けている。ノストローモは自分が「重宝な男」であると確信し、グールドは自分が卓越した鉱山経営者であると確信し、モニガムは革命のさなか自分だけがグールド夫人を守り通せるのだと確信し、デクーは自分が人より知性の上で優れていると確信している。だが「確信」とは、デクー自身が観念的には理解しているように、実は「行動もしくは感情の上で、自分を有利にしてくれるものに対するその人独特なものの見方」(“a particular view of our personal

advantage either practical or emotional” *Nostramo* 164) に過ぎないのである。このような確信にとらわれている限り、移り変わる世界の中で変わり続ける自分を認識できず、変化に抗ううちに苦しみが生じる。それはあくまでも「個人的主観的なもの」(水野 151)であり、ものの見方さえ変えれば苦しみから解放されるかもしれないのに、それができないのである。

『ノストローモ』の中で、ただひとり無我に近い境地にいたる登場人物は、グールド夫人である。「知恵に目覚めた心は、理論を立てたり覆したりすることには偏見を正当化すること同様にかかわらないし、いい加減なことばも持たない。知恵に目覚めた心が語ることばには、清廉で、寛容で、慈悲深い行動と同じくらいの価値がある」(“the wisdom of the heart having no concern with the erection or demolition of theories any more than with the defence of prejudices, has no random words at its command. The words it pronounces have the value of acts of integrity, tolerance, and compassion.” *Nostramo* 67) と語り手は述べている。グールド夫人は自我への執着を捨て、周りの人々がそのときどきに置かれた状況を敏感に感得し、束の間ながら癒しを与えるのである。

コンラッドの作品は一貫して、情緒的に未熟な登場人物の感情の軌跡を具体的に描き出している。心理学的に分析して見せるのではなく、ただひたすらに感情の微妙な動きを読み手に伝えるのである。養老孟司は次のように述べている。「観念を重視する傾向はユダヤ教、キリスト教、イスラム教の一神教的世界に強く、反対に感覚を重視する傾向は仏教的、多神教的世界においてより強く」見られる(38)。文学作品という、観念よりも感覚を重視した芸術作品の分析には、観念的な心理の分析より感覚的な感情の描写の方がふさわしい。ちなみに、“emotions”(感情・情緒)という英語は、19世紀後半において、すでにショーペンハウアーやウィリアム・ジェームズによって用いられている。しかし、20世紀の終りまでは、欧米ではそれほど重要な語とはみなされていなかったようである。よって、レイモンド・ウィリアムズの『キーワード辞典』(*Keywords: A Vocabulary of Culture and Society* 1976/1983)には、この語は収録されていない。『新キーワード辞典』(*New Keywords: A revised Vocabulary of Culture and Society* 2005)に初めて登場する。キース・オートリー(Keith Oatley)によると、西洋文学には、社会生活の裏にある人間の感情を理解しようとする伝統が綿々と流れているにもかかわらず、西洋の文学理論には、アリストテレスのカタルシスの理論を除いて、感情への言及がほとんど見られない(152)。このことは養老孟司の言うように、東洋の宗教がどちらかと言うと感覚を重視してきたのに対して、西洋の宗教が観念を重視してきたことと無関係ではないであろう。

コンラッドの作品を仏教的に読み解くにあたって、コンラッド自身が仏教の教理を正しく理解していたかどうかは重要ではない。重要なのはむしろ、読み手自身が文化的背景として仏教的世界観を内蔵しているかどうかである。コンラッドの作品中『ノストローモ』は、そのスケールに相応しく、仏教で言うところの「三法印」—「諸行無常」、「諸法無我」、「一切皆苦」—の三要素が、テーマとしてバランスよく取り上げられている。しかも、この作品では、「時間」(「諸行無常」)が冒頭に、壮大な自然の動的な描写をとおして紹介され、その後それを背景として「自我」(「諸法無我」)と「感情」(「一切皆苦」)が、国籍も年齢も性格も異なる多くの登場人物の苦悩をとおして暗示されている。

欧米の批評家の中には、書簡中に見られるコンラッドの世界観は悲観的過ぎると考える批評家も少なくない。だが、仏教的な文化を内蔵する日本を含む東アジア圏の読者はむしろ共感を覚え

るのではないだろうか。オートリーが示唆しているような「感情」に焦点をあてた文学理論を立てることが可能かどうかはさておき、コンラッドのような広い世界観を有する西洋の作家の作品に関しては、異文化的な観点からの読みも十分成立し得ると考えられる。

【注】

- 1) 文芸批評における理論について、『最新文学批評用語辞典』は次のように定義、解説している。理論とは「文学作品を分類・分析し、ときにはそれを解釈・評価するときの原理」であり、「どのような批評的な読みの行為にも、その解釈や分析にかかわる、あるいはその読みを正当化する理論が前提とされている」(川口・岡本288)
- 2) ちなみに、「一切皆苦」の原語に当たる“*dukkha*”という語もまた、苦しみだけではなく、すべての感情を包含する。(Rahula 16-18)
- 3) これらの作品の仏教的な見地からの具体的な分析については、参考文献中の奥田の各論文参照。

【参考文献】

- ・ウィリアムズ、レイモンド編『キーワード辞典』椎名美智・武田ちあき・越智博美・松井優子訳、平凡社、2002年。
- ・鍛冶哲郎『『読み手』のあなたへ―読者反応論』『知の教科書：批評理論』丹治愛編、講談社、2003年：31-53。
- ・川口喬一・岡本靖正編『最新文学批評用語辞典』研究社出版、1998年。
- ・田近裕子「推論」『英文読解のプロセスと指導』津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ編、大修館書店、2002年：185-207。
- ・ベネット、T.・グロス、L.・モリス、M. 編『新キーワード辞典』河野真太郎・秦邦生・大貫隆史訳、ミネルヴァ書房、2011年。
- ・水野弘元『仏教の基礎知識』春秋社、1971年。
- ・養老孟司「私とは何か」『円覚』300、円覚寺派宗務本所編、円覚寺派宗務本所、2012年。

Works Cited

- Conrad, Joseph. *Heart of Darkness and Other Tales*. Oxford: Oxford University Press, 1990.
- . *Lord Jim*. London: Penguin Books, 1949.
- . *Nostromo*. Oxford: Oxford University Press, 1984.
- Galsworthy, John. *Castles in Spain and Other Screeds*. Heinemann, 1927.
- . “Joseph Conrad: A Disquisition.” *Conrad: The Secret Agent*. Watt, Ian. ed. London: The Macmillan Press, 1973: 89-98.
- Garnet, Edward. “On Nostromo.” *Conrad: Heart of Darkness, Nostromo and Under Western Eyes*. Cox, C.B. ed. London: The Macmillan Press, 1981: 36-9.
- Karl, Frederic R. & Davies, Laurence, eds. *The Collected Letters of Joseph Conrad*. vols.1/2. Cambridge: Cambridge University Press, 1983/1986
- Lester, John. *Conrad and Religion*. London: Macmillan Press, 1988.
- Mann, Thomas. “Joseph Conrad’s *The Secret Agent*.” *Conrad: The Secret Agent*. Watt, Ian. ed. London: The Macmillan Press, 1973: 99-112.
- Najder, Zdzislaw. *Joseph Conrad: A Chronicle*. Cambridge; Cambridge University Press, 1983.

- Oatley, Keith. *Emotions : A Brief History*. Malden : Blackwell Publishing, 2004.
- Okuda, Yoko. "Detachment and Endurance in Conrad's *Victory*." *Bulletin of Atomi Junior College* 35(1999) : 63-76.
- . "Heart of Darkness' and Cunninghame Graham." *L'Epoque Conradienne* 27(2001) : 69-82.
- . "The Logic of Accident : the Significance of the Dramatic Action in *Lord Jim*." *Tsuda Inquiry* 8(1987) : 1-21.
- . "*Nostromo* : Man and Nature." *The Tsuda Review* 33(1988) : 99-128.
- . "*The Secret Agent* : Indolence and Enterprise." *The Tsuda Review* 34(1989) : 97-114.
- . "*Under Western Eyes* : Words and the Living Body." *The Conradian* 16-1(1991) : 19-36.
- Rahula, Walpola. *What the Buddha Taught*. London : Gordon Fraser. 1978.